

IMT展示

内科講堂の独逸人教師肖像写真

寺田鮎美

インターメディアテクの常設展示のなかに、かつて東京大学医学部附属病院内科講堂の演壇後方の大壁面に掛けられていた、内科学歴代教授の肖像画・肖像写真19点がある。総数44点が五段にもわたって並んだ壮観なパノラマ（図1）は、内科講堂が入っていた内科研究棟の取り壊しにともない失われることになった。しかし、肖像画・肖像写真群は、東京大学の歴史を伝える貴重な学術標本として、建物の解体に先立ち、2015年に東京大学総合研究博物館に移管となり、その一部が、2016年に特別展示『医家の風貌』として3階MODULE（モジュール）にて公開された。2021年からは、2階ACADEMIA（レクチャーシアター）と3階HOMAGE（バルコニー）に場所を移して展示されている。本稿では、このなかから、明治期に西洋近代医学を日本に伝えた独逸人内科教師のホフマン（1837-1894）、ウェルニツヒ（1843-1896）、ベルツ（1849-1913）の肖像写真3点（図2）に関する研究の一端を紹介してみたい。

ホフマン、ウェルニツヒ、ベルツの肖像写真

ホフマンは、明治政府が独逸医学の導入のために招聘した最初の独逸人教師二名のうちの一人で、外科医のミュルレル（1822/24-1893）とともに1871（明治4）年に来日し、大学東校・東京医学学校（現在の東京大学医学部）にて内科、病理学、薬物学を教授した。ウェルニツヒは、1874（明治7）年に来日し、二年間にわたり東京医学校でミュルレルの後任として産婦人科学を、ホフマンの後任として内科学を担当した。ベルツは、1876（明治9）年に来日し、はじめ生理学と薬物学を教え、ウェルニツヒが去るとその後任として内科学を教えた。ほかに、産婦人科学なども担当し、東京医学校時代から東京大学医学部に二十六年間の長きにわたって在任している。

独逸人教師肖像写真3点の素材は、ゼラチン・シルヴァー・プリントである。サイズは、ホフマンが縦535・横430mm、ウェルニツヒが縦530・横420mm、ベルツが縦620・横450mmで、額サイズになるといずれも四方100cm

を超える。明治期の独逸人教師の肖像がなぜかくも大きなサイズの写真として作られたのか、そしてこれらがいつから内科講堂に掲げられるようになったのか。『東京大学医学部百年史』（東京大学医学部創立百年記念会・東京大学医学部百年史編集委員会編、東京大学出版会、1967）の内科講堂に関わる建物の歴史の記述と併せて、医学部の卒業記念写真帖等の写真資料をたどると、いくつかの事実が確認できる。そこから、推測も含めてではあるが、これら問いの答えが見えてきた。

最初に掲げられたベルツの肖像写真

東京帝国大学医科大学附属病院の内科講堂は、明治中頃より構想が始まった、本郷キャンパス創設時の建物配置を入れ替えるという新建物配置計画にしたがい、1904（明治37）年に完成する。翌1905（明治38）年の医科大学卒業記念写真帖（総合研究博物館所蔵三宅コレクション）には、内科教授の青山胤通（1859-1917）がこの講堂内で講義を行う様



図1 内科講堂の内観。2015年5月、総合研究博物館撮影。

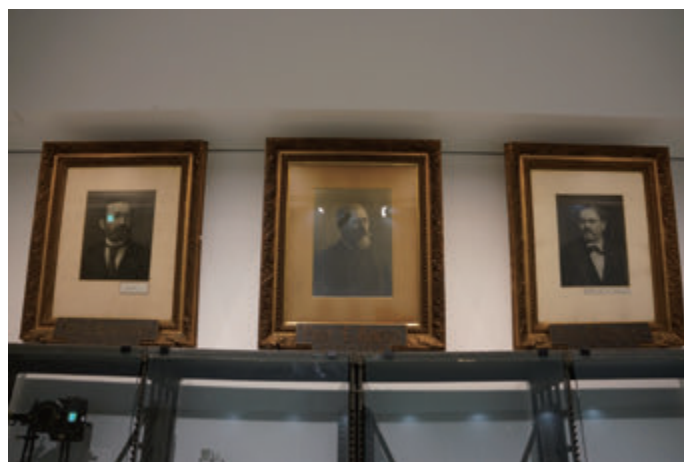


図2 インターメディアテク3階に展示中のホフマン（左）、ベルツ（中）、ウェルニツヒ（右）の肖像写真。

子の写真があるが、教壇後方の壁面には黒板以外何も設置されていない。1907（明治40）年の「東京帝国大学医科大学在学記念帖」（三宅コレクション）の写真でも、同じ壁面に肖像は掛けられていないことがわかる。

一方、1909（明治42）年の『明治四拾貳年東京帝国大学医科大学在学記念』写真帖（三宅コレクション）には、内科教授の三浦謹之助（1864—1950）の内科臨床講義写真があり、講堂の演壇後方の壁面上部にベルツの肖像写真1点が掛かっているのが見える（図3）。内科講堂で確認できたなかでは、この例が最も古く、内科講堂に初めてベルツの肖像写真が掛けられたのは1907年から1909年の間と推測できる。当時は、1902（明治35）年に名誉教師の称号を贈られて東京帝国大学を退任したベルツのことを直接よく知る関係者も多く、敬愛の念を込めてベルツの肖像が最初に掲げられたのかもしれない。

1915（大正4）年の医科大学卒業記念写真帖（東京大学文書館所蔵）には、同じくベルツの肖像写真1点が壁面に掛かっている内科講堂の写真が確認できる。これに対し、1927（昭和2）年に作られた、1923（大正12）年卒業生の『十二年会記念写真帖』（東京大学文書館所蔵）にある、内科教授の島蘭順次郎（1877—1937）の内科臨床講義風景（撮影は関東大震災より前）の演壇後方の壁面には、ベルツの肖像写真は確認できないものの、その下にあたる位置に、左から入澤達吉（1865—1938）、青山、三浦の肖像画が見える（図4）。1915年以降、1923年までに、ベルツの肖像写真の下段に、内科教授三名の肖像画が加わったと考えられる。

これら3点の油彩による肖像画は、現在インターメディアテクに展示中で、制作年は青山像が1912（明治45年／大正元）年（和田英作画）、三浦像が1920（大正9）年（黒田清輝画）であり、入澤像は1920年代と推定されている（安田稔

画か）。したがって、医学部卒業記念写真帖からは、これらの肖像画が内科講堂に掲げられたのは1915年以降と推測したが、写真は写真帖の作成年より前に撮られる場合もあるため、肖像画制作年の1912年以降にその可能性を遡って、青山像が肖像画では第一号としてベルツの肖像写真の真下に掛けられたと推測できる。続いて、1920年以降、1923年までに青山像の左右に入澤像と三浦像が加えられたのだろう。

震災後の内科講堂の計画的な肖像掲揚

1923（大正12）年9月1日に起こった関東大震災は、本郷キャンパスにも甚大な被害を及ぼした。上述の内科講堂も例外ではなかったようである。大学当局による全学的な関東大震災復興計画のなかで、キャンパス計画を主導した工科大学建築学科教授の内田祥三（1885—1972）の設計により、1938（昭和13）年、病院の外來診療所の北側に巨大な内科病棟、研究室、臨床講義室（内科講堂）が



図3 「三浦内科臨床講義」『明治四拾貳年東京帝国大学医科大学在学記念』写真帖より。1909年12月、佐藤写真館撮影、三宅コレクション。



図4 「臨床講義」（島蘭内科）『十二年会記念写真帖』より。1927年3月、樫三光堂、望月写真館撮影、東京大学文書館所蔵（F0025/S01/0029を改変）。

Ouroboros

完成する。施設部旧蔵の「東京帝国大学営繕工事記録写真帳」（総合研究博物館小石川分館所蔵）には、1938年11月30日撮影の医学部附属医院内科講堂内部の写真が残る。これを見ると、既に肖像写真・肖像画が演壇後方の壁面最上部に掛けられた状況が施設の完成写真として記録されている（図5）。

本写真に確認できるのは、一番左がベルツで、その右には、日本人の歴代内科教授の各肖像が並ぶ。佐々木政吉（1855—1939）、青山胤通、三浦謹之助、入澤達吉、稲田龍吉（1874—1950）、島蘭順次郎の順である。青山、三浦、入澤の肖像画は、1927（昭和2）年作成の医学部卒業記念写真帖に確認できたものである。それ以外の佐々木と島蘭のゼラチン・シルヴァー・プリント肖像写真および稲田の油彩肖像画も現在インターネット上に展示されており、稲田像の制作年は1934（昭和9）年（中沢弘光画）である。

図5には写っていないが、ベルツの左には、彼の前任にあたる内科教師のホフマンとウェルニツヒの肖像写真があったものと推定される。本写真に見える壁面全体に注目すると、最上段の額が掛かっ

ている列だけでなく、その下一列と黒板両脇に三列の水平線状の部品が備えられている。これらは、後に撮影された図1や図6の写真を見れば明らかのように、額を支えるためのものである。つまり、肖像を壁面全体に掛けることが内科講堂の内装工事計画および完成後の運用計画に組み込まれていたのだろう。

したがって、震災後の内科講堂が完成する時点で、既にあったベルツの肖像写真と並べるために、同様に大きなサイズでホフマンとウェルニツヒの額装肖像写真が作成されたのではないかと考えられる。この時点で肖像画が制作されていた青山、三浦、入澤、稲田と並べるために、佐々木および島蘭の肖像写真も同じように作成されたのではないか。これ以降、内科講堂には、独逸人教師三名を先頭にして、歴代内科教授の肖像が随時足されながら掛け継がれていく。

時代が下るが、1998年に東京大学総合研究博物館の特別展示『博士の肖像—一人はなぜ肖像を残すのか』で紹介された内科講堂の壁面の状況は、五段にわたって41点の肖像画・肖像写真が並ぶ壮観を呈していた（図6）。最上段を見ると、左端から3点がホフマン、ウェルニツ

ヒ、ベルツの肖像写真、その右には、佐々木から島蘭まで歴代内科教授の肖像が並ぶ。図5の1938年完成の新内科講堂に掲げられていたのと同じ順番である。ただし、図5と図6の写真を比べると、各肖像の間隔が狭められており、肖像を掛け足していく過程でそれを調整した様子が窺える。2015年、肖像写真・肖像画群が内科講堂から取り外される直前の記録写真（図1）には総数44点が写っており、図6との比較により、1998年から2015年の間にも壁面の下方左右に肖像が足されていた事実が確認できる。

名刺判写真からの拡大複製写真

それでは、独逸人教師の肖像写真はどのように作られたのだろうか。詳細の解明には至っていないが、手がかりの一端にはたどり着くことができた。総合研究博物館所蔵三宅コレクションのなかに、ホフマンの肖像写真がある（図7）。この名刺判の鶏卵紙写真（写真サイズ縦93・横58mm）は、ホフマンが日本に滞在していた1871年から1875年の明治初年代に、オーストリア人写真家のウィルヘルム・ウィルマンが横浜で開いていた写真館で撮られたものである。大学で



図5 「医学部附属医院内科講堂内部（一）」『東京帝国大学医学部附属医院内科及小児科研究室一部及講堂並内科及小児科研究室玄関其他新営工事写真帖』（東京帝国大学営繕工事記録写真帳）より。1938年11月30日撮影、小石川分館所蔵。



図6 「内科講堂」木下直之編『博士の肖像—一人はなぜ肖像を残すのか』より。1998年、東京大学総合研究博物館、p. 95。

ミュルレルやホフマンの講義を訳解していた三宅秀（1848－1938）宛にホフマン自身から贈られたものと推定され、台紙裏面には万年筆書の「T. Hoffman」の自署がある。

このホフマン像が内科講堂の肖像写真と同じであることから、内科講堂の肖像写真はこの名刺版写真を拡大複製したものという推測がつく。内科講堂のホフマン肖像写真には右下に彼の自署の拡大複製が添えられている。三宅コレクションと同じく、名刺版写真の裏面に書かれていたものであろう。しかし、この自署と三宅コレクションの肖像裏面にある自署は同じ筆跡ではあるが、厳密に同一ではない。おそらく同じ肖像写真がどこかにあり、それから複製が作られたのだらうと予想される。

入澤達吉は、1934（昭和9）年6月に発表した記事「明治初年来朝の独逸人教師と其写真」（『中外医事新報』1208号、pp.219－223）のなかで、1933（昭和8）年秋、大学構内にミュルレルの銅像はあるが、ホフマンは写真すら掲げていないとの話になり、ホフマンに直接教えを受



図7 ホフマン肖像。1871－1875年の間、ウィルヘルム・ウィルマン撮影、横浜、鶏卵紙写真、厚紙台紙貼付、三宅コレクション。

けた卒業生で存命の二人に尋ねてその肖像写真を手に入れたと述べている。その写真は横浜の外国人の写真店で撮影したもので、二枚とも裏にホフマンの自署があったという。本記事に掲載された図版の像も見比べて、これら二枚が三宅コレクションのものと同一肖像写真であったと判断できる。

入澤は、ウェルニッヒの写真についても方々に尋ねた結果、東京大学医学部で最初の外科教授を務めた故・宇野朗（1850－1928）所蔵のアルバムによりやく見つかり、この同じアルバムからミュルレルの後任であった外科教師のシュルツェ（1840－1924）の写真も借用して複写をしたと語る。本記事の図版にある、入澤が入手したウェルニッヒの肖像写真は内科講堂に掛けられていたものと同一像である。

関東大震災の復興キャンパス計画により、内科講堂の入る建物が竣工するのは1938（昭和13）年であるから、この時までに入澤が探して手に入れたホフマンとウェルニッヒの肖像写真から拡大複製が作成され、上述のように、二人に先んじて震災以前の内科講堂に明治期より掲げられていたベルツの肖像写真とともに、これらが震災後の新内科講堂の壁面に並べられたと考えておかしくない。あとは物証が見つけれないかというところである。そして、拡大複製のために元写真を撮影する必要があったと考えられるが、それを請け負った写真家が誰であったのかも、今後の調査の要点となるだろう。

特別公開『独逸医家の風貌』

内科講堂のホフマン、ウェルニッヒ、ベルツの肖像写真には、これらを2016年の特別展示『医家の風貌』にてインターメディアテクで展示し、間近に見るようになって以来、興味を惹かれてきた。これが、特別公開『独逸医家の風貌』（2022年9月13日－12月11日）の企画を構想するきっかけの一つとなった。

本展示では、本稿で報告した研究にもとづき、これら3点の独逸人教師の肖像写真に改めて光を当てるとともに、総合研究博物館所蔵の三宅コレクションより、日本の西洋医学黎明期に活躍したお雇い外国人や東京大学医学部独逸人教師の肖像写真および関連資料26点を公開した。これらに見るさまざまな「独逸医家の風貌」を通して、日本の近代医学の発展の礎となった独逸医学導入の歴史の一端を振り返りつつ、明治新政府が独逸医学の導入を決断する際の立役者となった相良知安（1836－1906）を顕彰した石碑（展示では拓本を紹介）や、上述の1934年の記事にて入澤が言及しているミュルレルの銅像など、今日の東京大学キャンパス内に残る独逸医家関係の文化資源にも注目した。

本展示を開催する頃には、ウィズコロナのミュージアム活動が定着していたが、構想段階では、まだ人や物の移動に制限が生じたコロナ禍中にあった。自分たちのコレクションを見直し、活用することの重要性を再認識するなかで、本展示企画に取り組んだことは、自分がどのようにコレクションに向き合い大学博物館で仕事をするのか、今後につながる良い経験となった。

最後に、本稿で報告した研究および『独逸医家の風貌』展の開催は、関係資料をこれまで整理・調査し、展示・公開してきた当館研究者らの仕事に助けられている。白石愛特任助教、関岡裕之特任准教授をはじめ、皆様に心より感謝申し上げます。また、サウンドレイヤー・アプリ「onIMT」にて、医学史に関心をもつ医学生と一緒に制作した「独逸医学の導入と相良知安—医学生が語る医学史」という音声解説レイヤーを2021年7月より公開している。内科講堂の独逸人教師肖像写真の展示鑑賞にぜひ役立ててほしい。



（本館インターメディアテク寄付研究部門
特任准教授／文化政策・博物館論）